



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 276 号)

「教育者・新島 襄」-2-

カルチュア・シヨツク

同志社大学名誉教授 井上勝也氏



<前号 「新島襄・畢生の事業」 の要約>

- ・新島襄(1843—1890)の畢生の事業は、我国にキリスト教を宣べ伝えると共に、自由教育を通して我国の近代化に貢献することにあつた。
- ・晩年彼は1890(明治23)年の国会開設の年を期して同志社大学を設立することに邁進した。
- ・新島は自由教育と自治教会の両者が相互にその機能を発揮しあうとき、国家は繁栄するのだ、といった基本的な考え方をもっていた。この自由教育を実践した教育者新島に焦点を当ててお話しする。
- ・彼の人間観・世界観或いは教育観の形成に大きな影響を及ぼしたニューイングランドでの生活を、とくに教育観の形成といった視点から次号で見ていく。

「教育者・新島襄」-2- カルチュア・シヨツク

新島は一八六五(慶応元)年一〇月、上海から乗船しましたワイルド・ローヴァー号の船主ハーディー(Alpheus Hardy)の勧めで、マサチューセッツ州アンドーヴァーにあります名門校フィリップス・アカデミー(Phillips Academy)に編入学いたしました。幕末の江戸で二年間過ごした新島にとって、ニューイングランドでの生活は一八〇度異なった環境でありましたが、彼はこの新しい環境にうまく適応しており

まして、アメリカ到着後一年半たった一八六七（慶応三）年三月に祖国の父民治に宛てて長文の手紙を書き送っています。

この手紙は彼のニューイングランドにおけるカルチュア・ショックをよく示したものでありますので、興味深い個所をご紹介します。

此「ハーディーと申人のかく小子を世話致し呉候は全天上唯一真神（後に委くしるし候）への勤め、かつ日本の為とて仰山雑費を払らひ呉、一文一事の報酬をのそます、小子を重き客分の通ニ取扱呉、其上五年なり十年なりとも小子の為に修行料を出し呉候と兼而約束いたし呉候間、何卒御安心可被下候（『新島襄全集』3 書簡編 I p.32）。

このハーディーという人物は、新島在米中はもとより、彼が帰国して同志社英学校を設立し、合せて宣教師として全国にキリスト教の伝道活動をおこないます時、常に新島を実の息子のように暖かく励まし、財政的援助をおしまなかつた人であります。ただ今ご紹介いたしました一節からも、ピューリタンとしてのハーディーは、異邦人新島に対して、神の前であつてすべての人間は平等であり、兄弟姉妹であるといったキリスト教の博愛主義を理解させた一人であります。

次にご紹介いたしますのは、彼が住んでおりますアンドーヴァーという田舎町にありますいくつかの学校や工場についてであります。

且此アンドワは高名なる^{むら}邑にして聖学校、大学校（小子罷在候）、自由学校（此学校は一文も取不申候故、いかなる貧乏人も入門いたし学問修行いたし候故、此国には目あき目くら則ち読み書きの出来ぬものは一切無御座候）、婦人学校、其外種々の邑学校、貧院、病院等有之（是は邑の人々金を出し菓衣服食物等を求め乞者の如き者をやしなひ置なり、嗚呼仁政の支那日本に勝れる事茲に於て見るへし）、かつ種種の毛織場有之候、此場之大仕掛は水車、齒車、蒸気機関にして其至妙紙上に載かたく御座候（『新島襄全集』3 p.33）。

新島はここでフィリップス・アカデミーを「大学校」と表現しておりますし、フリー・スクール（free school）を「自由学校」と訳しております。マサチューセッツ州において義務制の初等教育機関は既に一八〇〇年代初頭から普及し始めていますが、この自由学校というのは無償制の初等教育機関のことです。またここで申しております婦人学校というのは、一八二九年にマサチューセッツ州で最初にできました女子のための中等教育機関でありますアボット・アカデミー（Abbott Academy）のことです。新島は一八六三（文久三）年、中国で出版された『連邦志略』という書物を読んで、アメリカの独立宣言文の要約や大統領制のことなど、民主主義的内容に驚嘆したことが密航を企てる動機の一つになりましたが、この書物の中で、無償制の学校や貧しい人々のた

めの養老院が存在することを既に知っておりました。しかしニューイングランドの片田舎にそれらの学校や施設が現実に存在し、想像以上に立派に機能していることや、蒸気機関による大規模な毛織物工場を眼のあたりにして、教育の普及とアメリカ文明の偉大さに驚いているのであります。

次に引用いたしますのは、聖学校—これはアンドーヴァー神学校 (Andover Theological Seminary) のことではありますが、彼はこの神学校の学生たちを次のように紹介しています。

扱此聖学校に罷在候書生は多分正直信実にして一切酒烟艸〔煙草〕等を不用、強而邪淫を避け決し而女色の事杯は不談、唯天地人間艸木鳥獸魚虫を造りて永々に存在こゝにもかしこにも被為在候あらたかなる神、乃ち以前に申せし天上獨一真神の道を修め、此世の罪を償へる聖人ジイエジユスの教を守り日夜不忘祈禱致し、其恩恵扶助をのそみ、己に克ち欲を禦き、父母に孝を尽し、兄弟姉妹朋友隣人を愛する事己に齊しく、偽詐佞弁を辱ち、悪口怒言を嫌ひ候故、其風俗の美しき事、何卒我朝放蕩之諸生酒をのみ自ら英雄とか称し、世間の人を見さげ豚犬とかよひ、親兄弟をけつけ〔蹴付け〕、情の知れぬ女郎になじみ遂に癩毒に染まり、其業を失ふのみならず大切な身を亡し、父母に難儀をかくる輩に見せ度そんし候 (『新島襄全集』3 pp.33~34)。

新島は神学校の学生を、当時我国にあつて天下国家を語りながらも国家の指導者としての道徳性に欠け、放蕩無頼をおこなう若者と比較しながら、キリスト教のもつ人間形成力を評価しているのであります。

さて、この父親宛の手紙の中で、自分のことや教師と生徒の関係について、次のように述べています。

扱小子義日本を去り候ひしより行義大に改まり候は一杯の酒も不飲、一服の烟艸もすわす万事信実に取り行、無解〔懈〕怠学問修行仕候故、人々小子を愛敬し大学校の頭取、聖学校の教師に至る迄も小子を深切に取扱、路上に出逢候ハ、手を握り(此国の礼なり)今日は如何御座ある哉と丁寧にあ挨拶いたし呉候、去ながら小子は益謙遜益勉強いたし成業の事をのみ期し居候 (『新島襄全集』3 p.35)。

彼はこの手紙を出します前年の一八六六(慶応二)年一二月に洗礼を受け、正式にキリストチャンになっておりますが、ニューイングランドのピューリタンの社会に入って、彼は行儀が大いにあらたまつた、と書いております。「三尺下つて師の影を踏まず」の儒教倫理の世界から、フィリップス・アカデミーの校長も、アンドーヴァー神学校の教授も、生徒である

新島に丁寧に挨拶をしてくれるデモクラシーの世界に入って、教授も生徒も人間として対等・平等であるといった考え方の背景にキリスト教の人間観があることを理解し始めるのであります。

新島は以上のような日常生活を通して、ニューイングランドを支配しているものが何であるかを学びとるのであります。彼の学びましたフィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジ(Amherst College)における教育体験も彼の人間観・世界観の形成に大きな意味を持っていました。

フィリップス・アカデミー

フィリップス・アカデミーは一七七八年の創立で、南北戦争後ニューイングランドが大きく世俗化する中でも、テイラー(S.H. Taylor)校長は生徒にトランプ遊びや喫煙、ダンスを禁じ、ひたすらにピューリタンとしての生活を守るように説いていました。フィリップス・アカデミーの当時のカリキュラムを見ますと、三年次には道徳哲学、地質・鉱物学、修辞学が必修になっており、演説会が盛んにおこなわれています。また、化学、物理学、天文学の原理を理解させるための実験設備が充実しており、実物教育(object lesson)が重んぜられていることがわかります。■